

# デジタル × 古典文学研究 のヒント集

古典文学の研究テーマに挑戦しようとする学生に対して、オンラインデータベースがどのように力を貸してくれるのか、石井先生ご自身の経験に即してわかりやすくご紹介いただきます。

石井 悠加 (いしい ゆか)



四国大学文学部日本文学科講師。専門は日本中世文学。鎌倉～南北朝時代の和歌表現と空間・絵画とがどのように関わっているかを研究している。主な論文に「『慕帰絵』の制作意図―和歌と絵の役割について―」（『中世文学』61号、2016年6月）、「西行伝絵巻と時宗―『一遍聖絵』『遊行上人縁起絵』東国遊行の場面について―」（『西行学』13号、2022年10月）など。

## 1. 教育利用のヒント 古典文学の場合

### 『もとの姿のイメージ』を持つこと

Web版「史料纂集」と「群書類従（正・続・続々）」はまだ利用を開始して数ヶ月ですが、これから教育の場面や研究の場面にどのように役立てていきたいか、その見通しを、図書館関係の皆さまと、学生の皆さんに向けて、「利用のヒント」としてお伝えてできれば幸いです。

教育利用の一つ目のヒントは、「ジャパンナレッジコンテンツの『もとの姿のイメージ』を持つこと」です。

ジャパンナレッジを使う学生には、各コンテンツである一つの辞書・辞典や全集・叢書について、それがもとは図書館の本棚のどこにどのような形で収まっている書籍であったのか、イメージを持ってほしいと思います。

たとえば図書館で、210番台の本棚の前に立ったこともなく、あるいは「日本国語大辞典」や「国史大辞典」、「群書類従」に触ったこともないまま、ジャパンナレッジやその他のWeb上のデータベースを検索することは、霞に石を投げるようなもので、何がどうヒットしたのかがよく分からないと思います。

図書館への導入後には利用者に向けたデータベース講習会をされると思いますが、できればその際は、書籍版を利用者が目で見て手に取れる形で進行していただくことが理想です。また書籍版の「史料纂集」の最初のページには、影印、つまり現物の写真が載っていますから、それを目にしておくことも、利用者がデータベースのイメージを持つための役に立つはずです。

昔、「インターネットをください」と電機屋さんに行くと人がいるという笑い話がありましたが、似たような話で、たしかにオンラインの情報の多くは、直接手に取って調べることができません。しかし、「史料纂集」や「群書類従」のデータベースの場合は一度書籍として刊行されたものが元資料となっており、手に取ってみることができるところから、学生の皆さんはぜひ図書館で本を手にとってみてください。

こちらの写真をご覧ください。これは四国大学の学生研究室の中の「史料纂集」と「群書類従」「群書解題」のコーナーです。



それぞれ、本棚にジャパンナレッジへの誘導文を貼り、また出版社のパンフレットや、自作のインデックスを可能な限り設置しております。

本棚の前に立った学生がすぐに、この叢書がいったいなんなのかが分かるように、そしてそのデータベースがいったい何について調べられるものなのかがひと目でわかるように工夫をしてみました。オンラインデータベースと、図書館や研究室の本棚に並ぶ本のイメージが、利用者の頭の中で紐付けられるようになるとうれしいと思います。

### ジャパンナレッジ流キーワードの当たり方

二つ目のヒントは「古記録初心者向けの『ジャパンナレッジ流キーワードの当たり方』」です。

以前のフォーラムでもこの点についてご質問があったようですが、何か検索したい事柄があっても、それをどういうキーワードで検索すればいいのかが分からないことがあります。

例えば、絵巻物について検索したい時には、「絵巻物」では全くヒットせず、「○○絵」や「絵詞」で検索しないと検出できません。このキーワードにたどり着くためには、これまで先行研究を熟読したり、先輩に聞いたりしながら少しずつ学んでいくしかありませんでした。それは今でも非常に重要な研究のステップですが、ジャパンナレッジを利用すると、新しい語彙を少し効率よく集めることができます。

例えば、「火事」について、「Web版史料纂集」で「火事」と検索します。すると137件の検索結果があります。この結果



には、「火事」という言葉を含む言葉が並んでいますが、他に「火事」の類語はないでしょうか？

ここで有効なのが、ジャパンナレッジに含まれている辞典系コンテンツの活用です。ジャパンナレッジの特長「全文検索機能」を使って、辞典系コンテンツを検索してみましょう。

まず、検索範囲を「見出し」から「全文」に変えます。そして、探したい現代語は「火事」ですが、その後に句点「。」を足します。これがコツになります。検索結果をみると「火事。」が含まれるものが表示されていますが、ここには国語辞典以外のコンテンツも沢山表示されています。



国語辞典の「デジタル大辞泉」と「日本国語大辞典」に絞ってみましょう。すると、88件が残りました。



ここには方言を含むさまざまな「火事」という意味の語、「火事」の呼び方が残りました。「赤馬」「熱流（あつながれ）」「怪し火」「戦火（いくさび）」「鬱悠（うつゆう）」などなど。これらをあらためて「史料纂集」で検索することで、火事に関する記事の取りこぼしがより少なくなるはずです。

これは教育現場にジャパンナレッジを導入するメリットです。記録類の中で「火事」を表す言葉といえば、例えば「回禄（かいろく）」があります。「火事のことを記録類では回禄と呼ぶことがある。」こうしたことは研究室の先輩や先生に聞けばすぐに教えていただけるものだと思います。

ですが、ジャパンナレッジでは、辞典系コンテンツでこのようにキーワードを自分で見つけて、そしてすぐに「史料纂集」や「群書類従」などのテキストデータベースで検索をかけることができます。初心者でもサポートなしにこれまでよりも広く古記録に親しみ、網羅的な調査ができるようになりました。



## “好き”を検索して研究の萌芽に！

三つ目のヒントは、「“好き”を検索して研究の萌芽に！」です。

大学生の皆さんも子どものころ、初めて国語辞典や英語辞典を机に揃えた時、まずは自分の好きなことば、気になることばを調べてみませんでしたか。どんなに専門的なデータベースの場合でも、気軽にまずは自分が関心を持つことばを検索すれば、それは研究の芽になっていくはずですよ。

たとえばサブカルチャーを入り口にして古典文学に興味を持った皆さんは、とてもユニークな着眼点を持っています。自分の好きなアニメやゲームのキャラクターに関する情報を、実際の歴史史料の中に目にするのはうれしいことです。そして史料の中でそれを発見していけるとなれば、そのまま研究につなげていくこともできます。

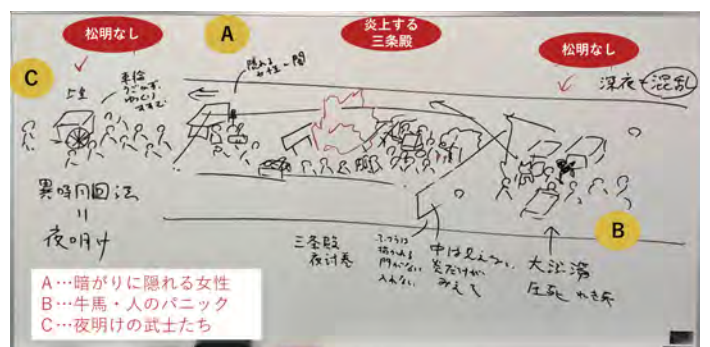
「Web版史料纂集」は、それがどんな史料なのかという「書誌情報」が見やすいですし、「史料纂集」には「標出」という日記の主な内容を説明した頭注もついていますから、検索した情報の前後の日の動向を把握することができます。「史料纂集」がもともと持っていた書籍としての使い良さと、ジャパンナレッジの検索サイトとしてのシステムの使い良さが合わさって、不安なく資料を扱うことができます。

大日本史料は、歴史上の主要なできごと、つまりトップニュースを立項します。しかし古記録のフルテキスト検索の場合には、何気ないできごとや、ふとした日常の思いを直接掘り上げることができますから、まるで中世のブログやSNSを検索しているのに近い感覚もあります。その不思議な感覚を、次に「研究利用のヒント 和歌と絵巻研究の場合」として具体的にご紹介したいと思います。

## 2. 研究利用のヒント 和歌と絵巻研究の場合

### 絵巻が描かない“夜の闇”

私がWeb版「史料纂集」「群書類従」を利用したいと思ったきっかけは、中世絵巻の中の「夜の闇」への興味でした。2022年夏にアメリカのボストン美術館所蔵の『平治物語絵巻 三条殿夜討の巻』が来日しましたが、そこにはいきいきとした中世の夜の騒動の一幕が描かれていました。



『平治物語絵巻』三条殿夜討の巻（ボストン美術館蔵、13世紀）ラフスケッチ（作成・石井先生）

激しい炎に焼かれる三条殿の片隅、Aの箇所には、背を向けてうづくまる女房がいます。彼女は炎にあかあかと照らされた庭にひしめく武士たちの探索から逃れようと、どうにか暗がりに身を隠している様子です。

そしてB、三条殿の外には、噴き上げる炎を見て慌てて駆けつけたものの、屋敷に入れず収集がつかなくなった牛馬や人々がパニックを起こしています。遠くには炎、しかし周辺は夜の闇の中で、それなのに松明を持っている人は一人もいないため、誰も牛車に轆かれた人物がいることにも気がつきません。

そしてC、絵巻をスクロールした左手の先には、牛車を取り巻いてゆるやかに院を連れ去る武士たちが描かれています。こちらの一群は、誰も松明を持っていないのに秩序を保っています。それは夜明けが来たためなのです。

東京国立博物館の模本の写真をお借りして、実際にAの暗闇に隠れる女房、Bの暗闇の牛車のパニック、Cの明け方の帰還をご覧くださいませ。いかがでしょうか。



【ColBase】(https://colbase.nich.go.jp/collection\_items/tmm/A-1566?locale=ja) をもとに作成

「夜討ち」という、闇の中でのテロ行為がもたらすパニックとその収束を、人々の行動がこのように雄弁に物語っている絵巻が、この軍記物語絵巻の傑作『平治物語絵巻』です。しかしそれにもかかわらず、夜の闇と炎がもたらす光と陰影は、全く画面には描かれていないのです。

日本の絵巻はなぜか夜の闇を描きません。それでは代わりにどのような表現の工夫が絵のモチーフや詞書の文中でなされているのでしょうか。このことについて考えるためには、当時の絵巻の鑑賞の方法や、絵巻作品中の夜を表象するモチーフ、また和歌を始めとする文学作品中の表現について調べる必要があります。

しかしそれだけでは新しい発見の手がかりは得られないかもしれません。新しい手がかりを得るためには、当時の実際の社会では、また日記などの記録の中のことばとしては、夜の闇はどのように捉えられているものなのかを調べる必要があると思います、Web版「史料纂集」と「群書類従」の利用を始めました。

利用はまだ始めたばかりですが、便利な機能とおすすめの検索方法、それから最後に、検索中に感じた一次史料検索の面白さについて、少しお示ししたいと思います。

## 書名一覧と書誌情報

検索をする時、まずは画面の右上にある「本棚:書名一覧へ」をクリックして、所収史料を確認します。所収史料がいつの時代のものか、どの立場の人物が書いた日記か、どのくらいの分量があるのか、をざっと把握しておきます。私の場合は、絵巻が数多く制作された時期や、絵巻制作に関与した人物などを知らうえで重要な古記録である『明月記』『勘伸記』『公衡公記』『花園天皇宸記』などが気になります。書名のみの一覧は詳細一覧と切り替えることができ、「『花園天皇宸記』とは何なのか?」「書籍版では何冊あるのか?」などがひと目で分かります。

## 「夜」の「眠り」

それでは検索を始めます。まずはシンプルに「夜」。「史料纂集第1期」では本文と標出で実に5,602件がヒットしました。総量を確認した後で、一文字加えてみます。「入夜」に絞ると78件です。スニペットをおおまかに確認すると、「入夜」という語は、筆者自身を含む、人々が暗くなってから移動する際や、夜に病状が変化した際、夜に火災が発生した際などに用いられるようです。また、「終夜」は200件で、雨や雪が一晩中やまない、誰かと一晩中語り明かす、夜中じゅう体調が悪かった、徹夜の宴席に参加したといった記事が多いようです。

日記筆者たちの、眠る以外の夜の過ごし方の典型が、ある程度出たことになるでしょうか。ここでふと、院政期に作られた絵巻『病草紙』の中で、夜の家の中でひっそりと病の症状に苦しむ人々を描いている場面があることが思い起こされました。

検索語	件数	メモ
「夜」	5,602件	
「入夜」	78件	移動、病状変化、火災
「終夜」	200件	雨雪、語り明かす、体調不良、宴席

では、続いて「眠り」についても検索してみます。眠ることを示す語を検索してみましょう。いつ寝たのかということに彼らは日記に日常的には書かないようなのですが、それでも「就寝」という語を検索すると、全10件がヒットします。そのうち2件が『花園天皇宸記』で、「深更就寝」と「天明就寝」でした。夜更けに寝た。夜明けに寝た。おや、これは少し面白かもしれない。漢字を変えて同じ語を検索してみましょう。「着寝」で検索します。すると、計39件がヒット。何とそのうちの37件が、『花園天皇宸記』の用例で、いずれも徹夜をしたあとに明け方から眠る際に使われていました。残りの2件は『台記』で、こちらも藤原頼長が徹夜をしています。

検索語	件数	メモ
「就寝」	10件	うち2件が『花園天皇宸記』（「深更就寝」と「天明就寝」）
「着寝」	39件	うち37件が『花園天皇宸記』、2件が『台記』

このように、少なくとも Web 版「史料纂集第 1 期」の中では『花園天皇宸記』に特徴的らしい「夜更かし」の記録のための語を見つけました。いつかの絵巻や音楽や和歌を好んだ人物の、就寝・起床時間の分析をしておくことも面白いかもしれない、などというアイデアが生まれます。

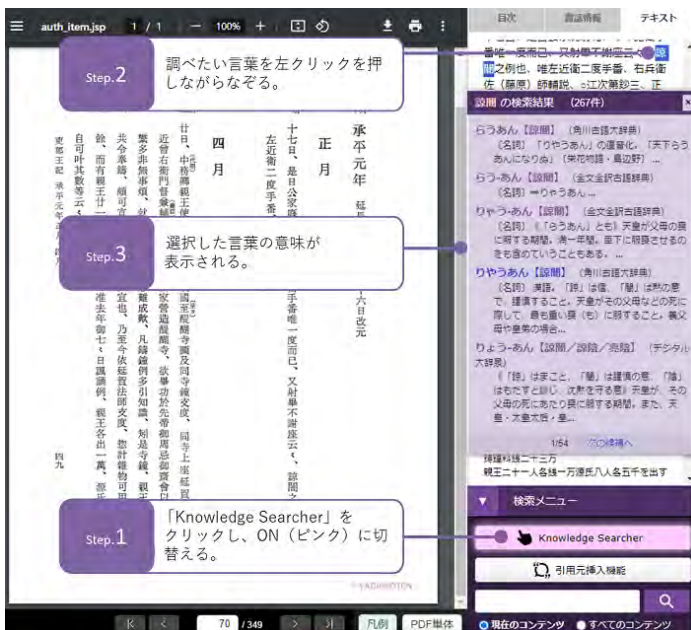
また、「夜」に「花」を見る例はないだろうかと「and 検索」をしたところ、あの有名な『明月記』治承 4 年（1180）2 月 14 日の眠れぬ夜の青年定家の、立ち上る梅の香りと翻る炎の記録がヒットしたことも付け加えておきます。



では「闇」という語の分布状況を見てみましょう。和歌が最多の 121 件。次いで雑部 88 件、神祇部 45 件です。和歌の用例を調べたい時には通常は『新編国歌大観』を引きますが、「群書類従」には和歌部がありますから、「闇」を詠む和歌の用例をまとめて確認することができます。

ざっと見てみますと、「まどう心の闇」や「春の闇」「五月闇」「むばたまの闇」「月夜に対する闇夜」など、実に豊かな闇の表現の世界が広がっていることが分かります。『古今和歌集』の凡河内躬恒の春の歌「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えぬ香やは隠るる」を思い出す方もいるでしょうし、『後撰和歌集』の藤原兼輔の「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」を思い出される方もいるでしょうか。

続いて「史料纂集第 1 期」を検索してみましょう。こちらでは「闇」が 302 件がヒットしました。すると「諒闇（りょうあん）」という言葉が圧倒的に多くヒットするようです。「諒闇」とは为什么呢？ここで便利な機能「ナレッジサーチャー」を使ってみましょう。



「ナレッジサーチャー」とは、史料の中に出てきた分からない言葉をなぞって選択するだけで、自動的にジャパンナレッジを検索してくれる機能です。検索してみると、「諒闇」は天皇

が父母の喪に服すことを指す言葉であることが分かりました。どうも、夜の闇を指すことはないようです。

このことを検索で確かめてみましょう。サブ検索欄で「次を含まない」を選び、「諒闇」をフィルタリングします。すると 10 件が残り、そのうち 8 件は、表記は異なりますが、やはり諒闇を示すものでした。つまり、我々のような、また『古今和歌集』の「春の夜の闇はあやなし」といったような「夜の闇」という言語表現の感覚が、日記の中ではあまり用いられないということが確認できました。

## ふと出会う明け方の風景

最後に、「明け方」の記録を検索していて感じた、史料検索の面白さについてご紹介したいと思います。「明け方」の記録の検索中のことです。まずはさまざまな「明け方」の呼び方を、先述の「調べたい意味の語に句点をつける」方法でリストアップしてから、「史料纂集」で一つずつ検索してみました。

天明、後朝、晨朝、黎明、暁、曉更、明曉、払曉、曉方、至曉、曙、鶏鳴、今朝、曉月……。それぞれがどのような場合に用いられるかを、スニペットでざっと確認します。

（うーん……「晨朝」は 2 件で仏事。「鶏鳴」は 39 件で、用例は多くない語句、早朝に家を出たことを記す際に使われる例が目立つようだ、そうするとたしか、『西行物語絵巻』の諸本の中に、出家を決意した西行が早朝に家を抜け出してお寺に行く場面、鶏を描いたものがあつたはずだ……）などと、気になる点をどんどんメモしていきます。

するとふと、和歌の表現では朝を表すのに最もよく使用する「有明」という語が、日記類には全く用いられないのだということに気がつきました。ところが、リストアップした語を順番に検索して「曉月」という語を検索した時、たった 3 件見つかった『勘仲記』の文永 11 年（1274）5 月 23 日、建治 2 年（1276）12 月 14 日、弘安 9 年（1286）7 月 21 日の記事は、とても印象深いものでした。ここに書かれた「曉月」は、和歌にも説話にも残らなかった、けれども大変印象深い、一人の宮仕えの学者が見聞きした、美しい明け方の月の光景だったからです。

「史料纂集」のデータベース検索の面白いところは、偶然の出会いの機会を多く持つことができること、そして、和歌や物語とは異なる、現実の人間の日常を自由に浮かび上がらせることができることです。データベースは古典文学研究の新しい扉といえるのではないのでしょうか。ぜひ、実際に利用して、その楽しさを試していただければと思います。

本記事は 2023 年 11 月の図書館総合展フォーラムで実施された講演の内容の一部を編集・抜粋して掲載したものです。

フォーラム動画・記事全文を公開中！

Web 版の活用に役立つ情報も満載！

<https://company.books-yagi.co.jp/archives/news/9232>

